

平成30年度1回

# 松本市総合教育会議会議録

松本市教育委員会

## 平成30年度第1回松本市総合教育会議会議録

平成30年度第1回松本市総合教育会議が平成30年5月17日午後3時00分市役所第一応接室に招集された。

---

平成30年5月17日（木）

---

### 議 事 日 程

平成30年5月17日午後3時00分開議

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 懇談

「これからの学校教育を考える」

- 4 閉 会

〔構成委員〕

市	長	菅	谷	昭		
教	育	長	赤	羽	郁	夫
教育長職務代理者		市	川	莊	一	
委	員	花	村	潔		
	〃	福	島	智	子	
	〃	山	田	幸	江	

〔事務局構成員〕

総	務	部	長	丸	山	貴	史						
行	政	管	理	長	中	野	嘉	勝					
地	域	づ	く	り	部	長	守	屋	千	秋			
地	域	づ	く	り	課	課	長	補	佐	布	山	智	子
健	康	福	祉	部	長	樋	口	浩					
福	祉	計	画	課	長	横	内	俊	哉				
こ	ど	も	部	長	伊	佐	治	裕	子				
こ	ど	も	育	成	課	長	青	木	直	美			
教	育	部	長	矢	久	保	学						
学	校	教	育	課	長	麻	田	仁	郎				
学	校	指	導	課	長	横	田	則	雄				

〔事務局〕

教育政策課長	小	林	伸	一
教育政策課				
教育政策担当係長	金	井	稔	
教育政策課				
教育政策担当係長	堀	敬	子	

《開会宣言》 午後3時00分

教育政策課長は平成30年度第1回松本市総合教育会議の開会を宣言した。

小林教育政策課長 議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の会議はお手元の次第により進行をいたします。最初にこの会議を主催する菅谷市長からご挨拶をお願いいたします。

菅谷市長 お疲れさまでございます。昨日に続きまして本日も夏日でございまして、お互いに健康には引き続き気をつけたいと思います。

平成30年度第1回松本市総合教育会議の開催に当たりまして、御礼方々一言ご挨拶申し上げます。

日ごろは赤羽教育長並びに各教育委員の皆様方には松本市の教育行政の推進に対しまして、当初からさまざまな面で大変ご苦勞をいただいておりますことに対しまして、心から感謝申し上げます。また本日は何かとご多忙の中、ご出席いただきますことに対しまして、重ねてお礼申し上げます。

ご承知のとおり、現在、松本市は健康寿命延伸都市・松本の総仕上げに向けまして、幸せを実感できるまちづくりを市民の皆様とともにつくる、共創していく生きがいの仕組みづくりに取り組んでおります。そして、これまで取り組んでまいりました結果として、過日報告された松本市の市民満足度調査におきまして、20代から30代に限定して若年世代、あるいは子育て世代層の調査結果において、松本市での暮らしに満足している人の割合が82.4%と総体として高い数値が得られました。これは、その前の年の場合、80代までの割合は90%を超えているのですが、若年の方の場合どうかということで実施したものです。私は、市長としてこの満足度調査でどんな結果になるか心配をしていたのですが、今の若い世代、あるいは子育て世代に限定した場合でも82%ということでもまあまあかなと思っております。

もちろん、各論としての細目には今後反省を加えながら取り組んでいかないといけない項目もございます。そのような状況のもとで、これからも

よりよいまちづくりをさらに推進していく上で、私がとりわけ大切と思っておりますことは、市民が日々の暮らしの中で、特別気負うことのないような状況で生きがいを感じることができる、そんな自分磨きのできるいいまちを市民の皆様とともにつくっていくことではないかと考えております。

そして、特に未来を担う子どもや若者の成長を後押ししていくことを、これまで以上に大事に大切に考え、子どもの権利を守り未来への投資として、子育てや教育の充実を図る、キッズ&ユース事業という言葉を使わせてもらっておりますけど、これはご承知かと存じますけれども、この数年間シルバーデモクラシーという言葉が流行しておりまして、これはどちらかと言えば高齢者の方々に対して重点的に施策を行うということでありました。これも大事ではありますけど、私としましては、やはりキッズ&ユースデモクラシーというこれは私の造語でございます。イニシャルをとってKYデモクラシーと言っておりますが、キッズ&ユース事業を積極的に進めてまいりたいと考えております。

さて、ここで昨年の総合教育会議に関して若干振り返ってみますと、春の会議では松本らしい学都松本をめざし、第2次松本市教育振興基本計画を教育大綱として位置づけるとともに、失敗してもやり直しができる複線型社会の構築を目指していくことについて懇談をいたしました。

また、秋にはスマートフォンやタブレット端末などの急速な普及に伴い、子育て環境が著しく変化していることから、「子どもの愛着形成について考える」をテーマとして大変有意義な意見交換をすることができました。

本日の総合教育会議では、「これからの学校教育のあり方を考える」をテーマとして意見交換してまいりたいと存じます。その1番のキーワードは、昨年の総合教育会議において赤羽教育長から問題提起がありました「人口減少」であると考えます。わが国の人口減少の傾向は、今後も当分続くものと思われませんが、私は行政をあくまでも行政者としてそのデメリットを最小限に抑え、社会の活力を維持していくために現時点において自然像が望めない状況下では、できる限り大都会などから移住による社会像への努力をしていかなければならないと考えております。そのためにも、市長部

局と教育委員会とが力を合わせ、知恵やアイデアを出し合い、未来に向けた具体的な取組みをしていかなければならない時期にきていると感じています。

教育委員の皆様におかれましては、結論を導き出すというのではなく、それぞれのお立場から余り形式にとらわれずご発言いただきまして、自由活発な意見交換ができることを望んでおります。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

小林教育政策課長 続きまして、赤羽教育長からご挨拶をお願いします。

赤羽教育長 第1回松本市総合教育会議の開催に当たりまして、教育委員会を代表してご挨拶を申し上げます。

先ほど、市長のご挨拶にもありましたとおり、昨年開催をいたしました総合教育会議では大変有意義な意見交換をすることができ、市長部局と教育委員会の絆がより一層深まったものと認識しております。本当にありがとうございました。

さて、新学習指導要領ですが小学校が平成32年度から、その翌年から中学校が完全実施となり、今年度から小学校は移行措置に入ってきております。それに伴い、小学校では英語が教科化、小中学校では道徳が教科化されているということでもあります。また、加えてプログラミング教育等新たなものも導入されるということで、学校現場におきましても変化の激しい時代に対応した新たな取組みが求められ、学校現場では教諭の多忙化が問題となり、「働き方改革」の必要性が叫ばれております。

振り返ってみますと、学校は子どものためと言われれば基本的には全てを受け入れてきた経過があり、それが多忙化を招いてきた一因にもなっているのではないかと考えておりますが、何よりも教育の原点である教師が子どもと向き合う時間の確保が求められていると考えています。

ところで私は、先週、横浜市で開催されました関東地区都市教育長協議会に出席をまいりました。分科会では「新たな教育課題への対応」や「働き方改革」についての議論もなされました。その後の懇親会では、多くの教育長と懇談する機会を持つことができ大変有意義でした。

多くの地域は、やはり人口の急速に減っていく状況への対応、また東京

周辺の一部の地域では逆に人口の急増への対応、そしてどこの地域でも「地域コミュニティのあり方」、そして、「教員の採用、人事等も含めた問題」、さらに「社会の急激な変化にどう対応していったらいいか」という共通の話題となり、大変有意義な懇談を持つことができました。

こうした状況の中で、私は現在、教育はなかなか出口の見えない混迷の時期を迎えているのではないかと考えています。しかし、この機会を学校、家庭、地域の役割をもう一度見直すいい機会と捉えまして、これからの学校教育のあり方を考えていくことが、ぜひ必要であるのではないかと考えております。

本日はこのような点も踏まえまして、直面する教育課題の方向を探っていく懇談になればと願っております。そして、本市の目指す学都松本のまちづくりの一層の推進に取り組んでまいりたいと考えております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

小林教育政策課長 ありがとうございます。それでは、早速懇談に入ります。菅谷市長、進行をよろしくお願いいたします。

菅谷市長 それでは、私が進行を努めていきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

本日の懇談テーマは、先ほど申しあげましたが「これからの学校教育のあり方について」でございます。

まず初めに、現在の教育課題についてということで、教育委員の皆様からそれぞれ、忌憚のないご意見をいただきたいと存じますので、私から僭越ですが指名をさせていただきたいと思っております。

それでは、福島委員さんからお願いいたします。

福島委員 教育委員としてこれまで4年間、松本市の義務教育、学校教育の現状を一部ではありましたが見させていただきました。日本全体で抱えている教育問題を少しずつ勉強させていただく中で、今、松本市を含め、日本の学校教育がうまく機能せず破綻している状況というのがあるのではないかと感じています。

学校に行けないとか、学校に行かない子どもたちの数が松本市で200人を超えていて、また日本全体でも10万人を越えているという事実だけ

を見ても、また先ほど教育長の話があった先生方の超勤、長時間勤務、多忙化、疲弊という問題からも、これまでのような教育システムではやっていけないということが明らかだと思います。

「これからの学校教育」という大きなテーマですが、理想としては教員の数を倍くらいに増やして、1クラスの児童生徒を半分にする。そのぐらいの教育費の増加というのは、一国民としてはあります。それを大原則とした上で、一保護者として今の公立の学校に望むことが一つあります。もちろん安全というものの次に私は学力保障というものが大事だと思っています。

最近、話題になった新井紀子さんの著書に「AI vs 教科書が読めない子どもたち」があります。これを読んで大変驚いたのが、今、公立の中学生の約5割が教科書の内容が読み取れず、2割が基礎的な読解ができていないということが調査により明らかになったということです。不登校の生徒を含め、中学卒業時に教科書を正確に読める力が付いている、そういう教育を何とか実現していただきたい。学力保障が大事だと思うもう一つの理由が、教育学者の本田由紀さんが指摘されていることですが、出身家庭が持つ諸資源の格差が小・中・高校と持ち越され、極めて大きな学力差が同じ高校生の中にもついてしまっているという点です。本田さんは教育学者ではありますが、教育の入り口としての家庭、それから教育の出口としての仕事、その3つの領域について、そこは繋がっていることを研究しておられるのですが、そういった教育格差の是正、学力の底上げというのは急務ですし、そのためには履修主義から修得主義的な発想も重要だと思います。

学力保障ということに加えてもう1点だけ、教育の出口としての仕事という観点から、高校教育における職業教育を見直すべき時にきていると思います。学校教育において働いて食べていけるという力が最終的には必要だと思うのですが、日本の高校教育の特徴として普通高校への進学率の高さ、具体的には普通高校が4分の3、専門高校が4分の1。OECDの平均だとそれが約半数ずつということですが、それからすると非常に特異的だと言われています。こうした日本の現状が、私たちが持つ普通高校志向



の強さが背景にあると言われていて、今後、専門高校に進学した生徒がその後、もし大学に進学したいと思ったときに普通高校と同様にその道が開かれているということが必要ですが、普通高校から大学という一つのパターンに固執することなく、私たちがその価値観というものを変えていくことが求められているのではないかと思います。

学力保障の点と高校の職業教育の点について、今、非常に気になっている点を挙げさせていただきました。以上です。

菅谷市長                    ありがとうございます。何かご質問等ございますか。

市川委員さん、何かありますか。

市川委員                    今日、お話ししようと思っていることと重なる部分がありました。それは、職業高校への進学する比率についてです。

私は農業高校土木科出身です。50年前の子どもたちが中学校のときに先生から「おまえ、どこの学校がいいよ」と進めてもらうときの感覚が今と全く違っていると思います。今、私たちが企業として求人をすると殆んどが大学卒業の子どもで、ごく少数、高校を卒業した子どもが来ます。正直、まちの中小企業でしたら大学卒業の子どもは採用しないと思います。景気が上がっているときは、私どもの企業にも沢山、高校を卒業した人が来ましたが、ここ一、二年、「ピタッ」と高校卒業の子どもが来なくなりました。ですから、子どもたちを育てていきたいというときに、そういう波で空いてしまう。今、職業高校に先生方が行きたい子どもというか優秀な子どもを送っていないのではないかと感じます。食べていける子どもがいなくなってしまうというか、強い子がいなくなってきたというのが、私の実感です。要するに、言い方が悪いかもしれませんが、「ちょっと行くところがないので、職業高校を受験してみろ」というようなことをしているのではないかと思います。そんな言い方をすると失礼かもしれませんが、中学校で進路を決定していく際に、「こういうところでお前食べていってみろ」、勉強が出来る、出来ないではなく、「ここでおまえ食べてごらん」と言って送り出しているのかどうか、今、実際に子どもを引き受けてみて感じています。

菅谷市長                    それでは、せっかくですから市川委員さん、引き続いて市川委員さんの

お話をお願いします。

市川委員

私が教育委員となって丸々1年が経ちました。まず、学校を知りませんので、昨年、松本市の小・中学校の学校訪問に12校参加させていただきました。そこで感じたことは、できることなら校長先生や教頭先生ではなく、一般の先生と話ができる機会もあればいいと感じています。そして、もう少しフリーなスタイルで話ができるようになるといいと感じております。また、教育委員と学校との間に何か見えない壁というのでしょうか、私としてはしっくりこないものがあり、意見等をもう少し言い合えるようなことがもし出来ればと感じたこの1年でした。

私が思っていることは、「やり直す」、それが福島委員の言った、職業高校と普通高校へ行っている比率の4分の3対4分の1。戦う土壌というか学ぶ土壌の少ない子どもたちを幾ら集めて増えるようにすると言っても、数の中での戦いになってきますので、増えるようにする中に「やり直すチャンス」ということが、非常に減っていると思います。というのは、弱気で学校へ入っているため、会社に入っても弱気です。失敗を怖がっているのです。私たちは建設業ですので、物をつくる時に怖がっていると何をやってもろくな物は出来ません。やはり、多少失敗してくれていい舗装が完成し、コンクリートを打つことが出来るようになります。失敗をしないようにとか、怖がっているため、失敗はしないのですが、先輩のやったとおりとか、あるいは本に書いてあるとおりの物しか作れないのです。私は、「これでは、お前つまらないだろう」と言うのですが、失敗を怖がっていると思うのです。

昔、若い技術屋が河川の帯工工事で両側から作って真ん中で接続しようと思ったら上流側と下流側と帯工の幅分だけが食い違っていて結局、片方を全部壊して100 m<sup>3</sup>以上のコンクリートを取り壊し作り直したのですが、それでも会社をクビになることなく「いいか、今度は気をつけろ」といって許してくれたことがありました。やり直しがきくことです。

難しい工事をするときには「必ず大きな失敗をしたことがあるものにしか仕事を任せない」という話があり、よく分かる気がします。チャンスを与えてやらないと、言われたようにしか出来ない。

私は、0点は3回とっても、1回10点取ればいいというぐらいの子どもが会社に来てくれた方が、育てがいがあるというか遊びがいがあるというか、そんなことを今、感じています。

もう一つ、平成30年度から小学校で道徳が教科化となりました。

私の中学校時代、道徳の授業は一切行わず、3年間オールサッカーでした。そのかわり、雨が降っても雪が降っても「お前たちが決めたことだからサッカーをやれ」と言われてきました。今から思えば、先生はそこで道徳を教えてくれたと思います。

昨年、小学校の道徳の教科書の選定にあたり、私も教科書を見させていただきました。そこで感じたことは、これからの学校の先生は道徳を本で教え、一人ひとりの子どもを評価しなければならなくなり、とても大変だと思いました。

そこで、道徳の授業を四賀や安曇、奈川地区といった自然環境に恵まれているところでやったらどうでしょうか。道徳の教科書をもし読むのであれば、ああいった山の中や田んぼの土手あたりで本を広げて読めば面白いのではないかと思います。

各学校が奈川に1校ずつ上がって行き、大自然の中で過ごすことで道徳が身につくのではないかという感じがしているところです。以上です。

菅谷市長  
山田委員

山田委員どうですか。

私も大賛成です。

先ほど、福島委員がおっしゃった学校が破綻しているというのは、現場に長くいたため、すごく感じています。日進月歩って日々進歩して成長していくことですが、まさにその逆を行っているような感じがして、またこんなことが、またこんなことがということがすごく多いなと感じています。現場は多分それに振り回されているのではないかなという気がしています。なぜかと考えたときに、一つは、トップダウンと言いますか文科省から「ポン」と下りてきたものを、そのままどこにもひっかからずに学校にストンと落ちてきているようなことが多いのではないかという気がします。例えば、不登校やいじめが少し増えてくるとすぐに「30日以上は何人いるか」「何件のいじめがあった」など学校現場に調査が下りてきます。

殆ど命令のような感じできています。先生たちは、それに対応しなければいけないので、教師の多忙化に繋がるようなことが最近増加しているのではないかという気がして、とても危惧しています。

「先生方が多忙化だから」ということで配慮してもらうことに私は大賛成です。しかし、子どもたちの学習内容はどうだと考えたときに教科書が以前に比べものすごく厚くなってきております。毎日、教科書を体づくりのためにランドセルに入れて小学生は来ているのかと思うくらい、私が指導していたころに比べたら、倍近く厚くなっている教科書もあります。それだけ学習内容が子どもにとってとても負担になってきていると感じております。それを、学校の先生は30人、40人に教えなければいけない、学力もつけなければいけないといった中で、どうしても画一的な指導にならざるを得ない学校の苦しさみたいなものをとても感じます。

私は、これ以上スピードアップしたり、便宜性は追及しなくてもいいので、子どもに学力をつける、それから、数年前「ゆとり教育」が批判され、そのときに言われた「生きる力」をつけるということをもう一度見直して、子どもにそういった力がつくような指導をこれからの学校はしていかなければならないと思います。そして、先生方ももう少しゆっくり、自分の特技や自分の個性、自分の考えが表に出せて、それを子どもに反映でき、テンポのゆっくりした時間が持てるような学校になったらいいと思います。いきなり180度変えて、毎日、毎日勉強しないで自由にとすることは無理なので、今のカリキュラムの中でも学力をつけることとは別に、どんな子も「この時間は楽しい」とか「この時間があるから頑張る」とか、子どもが自由な発想で自由に考えてやれるような活動が少しでも増えて欲しいと思います。そのためには、先生方の発想の転換が必要だと思います。

子どもが選択肢を広げたり自由に発想したりするには、先ほど福島委員がおっしゃったように、子どもの数を減らすとか、複数の担任にするとか、学年を越えた縦割りの授業をやってみるとか、教室以外の場所で先生以外の人から教わる時間をつくるとか、もう少し柔軟な内容が学校の中に少しでも入ってくると、今、不登校が増加している現状も少し緩和されてくる

のかなと思います。

ただ、学校訪問をして思ったことは、不登校の子どもたちを不登校でくくってしまっていることです。最近では、子どもや学校が原因というよりも保護者が原因で不登校となっている子どもたちが多いと感じています。もう少し掘り下げて考えないと、子どもたちが非常に可哀想かなとも感じています。

菅谷市長           ありがとうございます。山田委員さんが学校現場からのことも含めてお話がありました。ある意味、教育制度というのはなかなか難しいですが、赤羽教育長、実際に教師であられた先生から「もっと本当は自由にやりたい」というお話がありましたが、できそうですか。ここのところは夢を語ってもいいと思いますが、実際問題どうですか。

赤羽教育長           実際には、学習指導要領で大枠が規定されています。ただ、その中で各学校ができる範囲で工夫をしながら特色ある教育課程等を編成しながら、今、山田委員や皆さんがおっしゃったようなことをできるだけ実現したいという部分で取り組んでいく、そのせめぎ合いが実際は各学校で起きているというのが現状であります。常に新しい教育課程が出てくると、そのせめぎ合いがいつでも新しいものと今までで今のような理想と現実のせめぎ合いで学校現場は動いているというのが現実だというふうに思います。

菅谷市長           先ほど、市川委員のおっしゃったことは高校生が主体になりますか。

市川委員           そうですね。高校に送りこむ際の中学校が一番大事だと思います。高校へ進学するときに子どもたちにもう少し伝えて欲しいと思います。中学生は夢を持って入学してきますので、高校へ進学するときにその夢を職業でも食べていけるということを伝えてあげてもらえればと思います。

菅谷市長           それは教師の問題。それとも親でしょうか。

市川委員           親もありますが、私の経験からすると中学の時の担任の先生です。私の中学校の先生は「大きくなったらこうなるんだよ」とか、「これも面白いぞ」と伝えてくれました。そのことが非常に自分の中で残っています。

菅谷市長           それでは、次に花村委員お願いします。

花村委員           私は仕事上、特別な子どもたちを見る機会が多いです。

「朝起きてお腹痛いから学校行かないといっていますが、うちの子どこか悪いのでしょうか」ということを言うてくる親が多いです。しかし、私は、見ると大体わかります。私は、その子にそっと耳打ちし「学校面白くないよね」と言うのです。そのうちニコニコして、すっと気持ちを和らげながら帰るのですが、そういう子どもが最近多いです。

それ以外に発達障害とって明らかに病的な症状を持っている子どもも何人かいます。そういった子どもたちを見ている度に思うのですが、やはり学校では「指導要領」があつて、それを主としていかなければいけない、それはよく分かるのですが、中学校でしたら、一斉に入学して3年生になって卒業ですが、全員が同じように卒業するというのは、無理な話だと思います。優劣の差が絶対つくのが当たり前なので、それをどのように補うかといつも思っております。

発達障害の子どもで絵を描くことが大好きな子どもがいて、その子どもの描いた絵が全国の展覧会の中で入選したことがありました。その子の授業を見に行つたとき、他の子どもは一生懸命算数の授業を受けていたのですが、その子は先生の机の上でずっとカメラをいじっていて、クラスの子どもたちとの接点が全くありませんでした。

このような子どもたちは、その子の持つ特性を生かしていくような教育的な配慮をしていかなければ、社会へ出て、社会の一員として社会を構成していく数に入れなくなってしまう、要するに除け者にされてしまうのではないかと考えています。

以前、発達障害を持った子どもたちが集まる場所で壁を直していた左官の仕事を生懸命見ていた子どもがいました。そうしたら、親方が「一緒に塗ってみるか」といって、作業をやらせてくれたのです。その子は、その作業がすごく好きになり、結局、親方の会社に入り、親方も一生懸命その子に教え、今では一人前の左官になり、結婚して子どもがいます。そのような教育の仕方もあるのだなとつくづく思いました。

ですので、そういった子どもたちはハンデを持っているのだから、そのハンデに従った教育を個々に考えていかなければいけないと思います。義務教育が終わったら路頭に迷うと思うのです。ですから、そういう子どもに

は早い段階で自分の得意なものを見つけ、伸ばしてやるような個別な教育をとっていく必要があるのではないか、いわゆる「マイスター制度」というのでしょうか、そういったものを個々に考えていかないと、大きくなったときにどうしても社会の負担になる、のけものにされてしまうような気がします。そういったことを少しでもなくすためには、小学校、中学校からそういった、特別な特殊教育をしながらその能力を生かして、社会に出てもその能力が役に立つような方向性というものを考えた教育も一つ複線として考えていかないといけない世の中になってきたのかなと思います。

菅谷市長

ありがとうございました。

今、4人の委員さんにそれぞれの現在の教育課題についてお話いただいたのですが、もし委員さん同士何かご質問等、ご意見あればどうぞご発言をお願いいたします。

無いようですので、赤羽教育長から資料を含めて説明をお願いします。

赤羽教育長

今、各教育委員の皆さんから「これからの学校教育のあり方を考える」ということでお話をいただきました。特に一律一斉でなく学力保障ですとか、一人ひとり個に対応できるという教育の必要性、やり直しができる等いろんな現代の学校教育、また制度の十分でないということもご指摘をいただきながらお話をいただきました。まさに冒頭でもお話ししましたが、教育にはさまざまな課題が山積していると思っています。そのことも踏まえ、先ほどの市長の冒頭のご挨拶にもありましたように、昨年度の第2回総合教育会議の際に県下の少子化に伴う学校の現状ということで資料をお配りし、問題提起をさせていただきましたので、それについて、今日は説明をさせていただきます。

(少子化に伴う学校教育のこれからのあり方についての説明)

菅谷市長

ありがとうございました。今、赤羽教育長から「これからの学校教育のあり方について」のご説明がございました。これがたたき台ということでお話がありました。また、教育委員の皆さんから先ほどのご意見等絡めて

お話をいただければと思います。

最初に、赤羽教育長に確認したいことがございます。松本市教育委員会としての考えになるのか分かりませんが、松本市の中で人口減少した地域での学校の統廃合に関してはどういうお立場で今後進めていかれるでしょうか。

この資料を見ていますと、どちらかと言えば、「学校を残したいんだよ」というようにとれるものですから、松本市教育委員会というのは基本的には人口が減っていったとしても学校を残して行って、特色のあるという表現でいいのかわかりませんが、そういうふうにしていこうとしているのか、あるいは特色があるというのは一般論として松本の各小中学校でやろうとしているわけですから、そのときには統合してそういう学校にしていくということを考えてらっしゃいますか。その辺をお願いします。

赤羽教育長

現在、教育委員会としての議論は深めておりません。あくまでも私の個人的な見解としては、現在ある学校を特色ある学校づくりとして、少子化の学校については地域と共にぜひ存続の方向を探っていきたいと考えております。

ただ、将来的にそれが可能かどうかといことはまだわかりません。ぜひ、地域づくりとともにその方向を私は考えていきたいと思っております。

菅谷市長

ありがとうございました。

では、本日は結論を出す会議ではありませんから、教育委員の方々忌憚のないご意見いかがでしょうか。

花村委員

赤羽教育長のお話して下さった資料の9ページに「何が問題か」とあり1から5まであります。私は、3、4、5を先に考え、1、2は最終的な手段だと考えます。というのは、家庭があり、学校があり、地域があり、その3本柱で育てて子どもを育むことが私は本当の教育だと思います。そのどれが崩れても根幹が崩れて危うくなる。私は一番の基本は家庭だと思います。まず、家庭を大事すること、家庭がグラグラしたのではそこで育ててもらっている子どもが途方にくれるのではないかと思うのです。そして、家庭をサポートするべき立場が地域と学校だと思います。最近、学校が主の教育の柱だと考えるお母さん方が多いです。学校に預けておけば



子どもは見てもらえるというような考えになってしまっていると感じ、私は、どこか違うのではないかと考えています。

私も時々学校訪問をさせてもらっており、問題がある子どもさんが問題としてあげられますが、話を聞いていると、どうしても先程、市川委員さんが言ったような、家庭に何か問題がある状況が多々あります。いつも考えるのは、家庭を最大の根幹にして、そこに地域と学校が支えるようなそういった形を考えなければいけないと思います。極端に言えば、私は過疎化であっても一人でも子どもがいる限り学校は残すべきだと思っています。校長先生、教頭先生2人で生徒1人でも私はいいと思います。

これから過疎化が深刻になりますが、家庭をしっかりさせるためには、地域の支えをどうするかということが問題となってきます。地域の村おこしをどうするかといった時に、例えばICTで特化していくためには専門家を東京から呼んでくる、あるいはICTの会社を引き入れるとか、そういった村おこしのことも考えないといけないと思います。

家庭の根幹をきちっとしていただけるような地域をまずつくり、それから地域の社会でできることは最大限やって、本当に最終的に生徒1人でも学校は存続していくべきではないかとじゃないかと考えます。

菅谷市長

福島委員どうですか。

福島委員

私も、子どもがそこに1人でもいれば学校というのは、学校教育としては教育を受けられる環境というのがあるべきだと思っています。ただ、人口減少はもう明らかで、どんどん人が少なくなっていくときに、子どもの数が減って学校がなくなって過疎化というよりも、子どもを育てる世代の人たちがそこに居続けられる環境なのかどうかということです。

大人が増えないと子どもは増えません。学校を何とか特色あるものとしても移住したいと思うまで魅力ある地域をどうやってつくっていくかという、学校や教育委員会だけではスケールのには収まらない話だなと思います。

従って、学校を含めて全市が取り組んでいけないといけない課題なのではないかと思いました。

菅谷市長

このことは私が一番考えておりまして、当面、自然では無理でしょうね。

「いいまちをつくれば」とか、「いい地域をつくれば」といいますが、行政としてはそんなに簡単にいかないだろうと思います。ですから、この辺は全国の地方都市では非常に悩んでおります。ただ、松本はいい方です。統計的に見て一番いいところにいます。

先日の信濃毎日新聞に出ておりましたが、長野県の中でいくと、例えば、14歳未満の子供たちの人口に占める率は、松本はいい位置にいます。しかも、高齢化率にいたっては、松本市は市村の中でもトップクラスです。これだけ大きなまちです。ということは、生産人口も結構いるのです。それでもこういう状況にあるということは、なかなかそんな簡単にいかないだろうということで、理想はそうあって欲しいなと思っておりませんが、なかなか難しいかなと思っています。

市川委員

これが一番分からないことなのですが、子どもが減っていくというのは大人がいなくなるということですので、大人がそこにいれるようなものがあればと思うのですが、先程、市長がおっしゃったように一番難しいことだと思います。

昨年、奈川小中学校に学校訪問に行った際、先生方とお話をする機会がありました。その時、先生方は「こんないい所はないです」と言っておりました。私は、「こんな山の中に入ってしまったて、先生方は帰りたくないですか」と聞いたのですが、「できることならもう少しここにおいてもらいたいです」と言っておりました。先生方が皆さん奈川に住めば子どもが増えていいと思うのですが、そういうわけにもいきません。

今、山小屋を経営している人や働いている人を見ると波田地区等に家を作っております。涸沢や槍ヶ岳等で若い子たちが50人ぐらいいます。涸沢だけでも20人ぐらいいると思います。こういった若い子たちをそういう特区ではありませんが、奈川等から通うことが出来るようにすればどうでしょうか。特別任務ではないですが、ああいう人たちは案外外から来ています。地元から来ている人は少ないです。彼らが何をしているかという、山は11月に閉めますので、それから半年、またあちこち散らばって働いています。そういう散らばる子どもたちを冬の間だけでも、下りてきてここで住めるというか、何かそんなことを考えると引きとめておけるの

ではないでしょうか。特に過疎地の近くは山の近くですから、何かせつかく外から来ていて、外に帰っていく子どもたちをちょっと追いかけても50人、100人というのは考え方によっては出来るかなとちょっと考えました。教育長からこの資料をもらったときに、そんなこともちょっと考えました。

家庭を大事にという、花村委員さんの言っていることは、ひきこもりの子どもたち等の学校訪問をしたときに非常に大事なことだと感じました。しかし、直接親に対して教育委員会は言えませんよね。子どもや先生に対しては、「ああしろ、こうしろ」とすごく力入れ、専門先生も必死になって、親のところまで行きいろいろやっておりますが、その根本に助言することは出来ません。

菅谷市長

教育委員会で親の教育をやればいいじゃないですか。

そういう方向も変えていかないと。市川委員さんが言うのであれば、教育委員会自身のあり方も、一步踏み込んでそこまで入ってもいいのではないかと、いけない理由はないだろうと思います。どうなのでしょうね。

市川委員

その辺が一番問題ありますよね。

菅谷市長

赤羽教育長、いかがでしょうか。

赤羽教育長

先ほど、市川委員さんがおっしゃった、中学校の進路指導の問題もその辺に大きく関わってきています。昔は、どちらかというと教員の方が進路指導でイニシアチブを握って、この子はこういう特性があるからこういう進路がいいのではないかというような助言をして、その方向に進むというような形があったと思います。しかし今は、保護者、それから本人の希望が最優先されますので、保護者の希望とこちらの進路指導がずれて、どちらかというところ普通高校へ流れていくという、世の中全体に保護者の方たちはあえて主流を選択するという傾向があります。

菅谷市長

先生も最近は批判されてばかりで、親から責められるからみんな引いているというそういうスタンスがあります。今、日本のあり方自身が問題だということも、日本全体の大きな問題だと思います。

先ほどの移住の問題ですが、松本市はありがたいことで担当部が一生懸命移住促進をやってくれていて、松本市でどのぐらいの方がいらっしゃる

かは別としまして、松本市に移住してきた人は20代から30代の方々が60%を占めています。予想では、大体子育てを終えた50代か60代、おそらく高齢者で、それでも来ていただいて嬉しいですが、半面町会に入らず文句ばかり言う人が来ると困ってしまうなんてことも言っておりました。ところが、松本市は不思議なことに60%が20代から40代でした。覚えやすいです、20、40、60ですから。松本というのはそういう意味でいうと若い世代が多いのです。ですから、松本市に移住してからお子さんが生まれていることもあるのです。ただ問題は、今、委員さん言われたように、人口が少ないところに行って仕事ができるようになるかということです。そういった観点で移住してきた人を見ると特殊な人が多いのです。文化人、絵を描くとか陶器やる、あるいは農業をやってみたくとか自営業の人。ですので、一般の方はなかなか松本市には移住してきておらず、仕事はまちなかでやりたいとか、住むところは古民家がいいとか、いろんな方がいらっしゃいます。

それでは、山田委員さんどうぞ。

山田委員

私が生まれ育ったところはとても僻地で、すでに小学校も中学校も統合されて無くなってしまいました。しかし、この年になると小学校の時「あれは良かった、これも良かった、あれはおもしろかった」と次から次へと出てきて、どこかでPRできるといいのにと考えています。

それからもう一つ、市長さんがおっしゃったように、移住してそこに定着して長く住まない、一時来て人口が少し増えても駄目だなと思います。確かに松本市は60%が20代、40代というのは、やはりここが生活しやすい場所、交通の便とか、それから生活する上で便利なところだということが大きいです。私は「自分の生まれたところに絶対最後まで生活しないぞ」と若いときは思って早く出たいと思っていたので、その地域に住んでいる方にとってはいいところだけど、ここで生活をずっとしていくとなるというのが、どうしても若い人たちはひっかかると思うのです。自然に人口が増えていくというのは難しい。その良さを感じてここで一生暮らすぞという若い人が移住して、そこに居を構えないといけないなどということを思います。それにはやはり働く場所があるとか、例えば松本で

働いていてもその住むところまではそんなに2時間も3時間もかからないとか、すごく交通の便がいいとか、そういう魅力がないとなかなか人口が増えるということは難しいと思います。

確かに1人でも学校が存続した方が嬉しいですが、1人で学校にいるような立場になったときに、それでいいのかということを思いました。私、安曇にいた時、どんどん子どもの数が減少していくので、教育事務所の方と話をした時、「大野川を中学にして安曇を小学校にすることはできないですか」と言ったことがありました。スクールバスで朝中学生を送っていったら、向こうにいる小学生を連れて戻ってきて、終わったらまた行って帰ると、スクールバス1台でそういうのができると。中学の数もちょっと。そのときは生徒の数を落ちつかせたいという思いがあったので言ったのですが、具体的な工夫をしないと住んでいる方にとって魅力はあるけれど、ここでずっと定住しきるかという、自分の子どもはここに定住させたくないなというのが正直本音かなと思います。雪が降ったときのこととか、いろいろ考えると。ですので、学校を残したいというのが理想ですが、移住人口を増やす方向も切りかえて考えていかないと、過疎の村の学校存続は難しいなと思います。

菅谷市長

そういうことを考えますと、「合併しなければよかったのに」と私は思いました。合併してしまったら奈川地区にいた職員の方や住民が非常に便利でいいと、若者や子どもたちが松本市に住んでしまうのです。これは止めることができません。副市長と「職員の家族が松本市へ来てしまうと奈川の子どもが減ってしまい困ってしまうな」と話をしたことがありました。しかし、これはある意味致し方ないことだと思います。合併した村がやっていくためには、自分たちの村だけではやっていけないということだから合併を選んでいきます。合併があつて、松本市が大きくなり、面積も長野県で一番広くなりました。そして、奈川地区や四賀地区の生徒が減少してきた時、それを維持していくために税金を使わなきゃいけないと考えたときに、果たして松本市民の皆さんが教育委員の先生方がおっしゃったように「理想でもいいよ。そういうところにお金を使ってもいいよ」と理解していただけるかと思ったら、なかなか難しいことです。

今、国が「公共施設再配置計画」を進めています。松本市でもこれから30年間に20%、公共施設を集約化させないといけないという状況になってきています。これは国が「そうしなさい」と言っているもので、この中には当然学校施設も入っています。ですので、確かに気持ちはそうですが、市政運営していくためにはこういうことも入ってくるものですから、この辺が先ほど話にあったせめぎ合いになってどうするかということになるのか、これは極めて現実的な話で申しわけないです。ただ、本日のお話の中では余り「人口減少」ということにとらわれてしまうと、いくらい学校つくって特色があっても人口はまず増えないだろうということがあるものですから、「乗り越える」というにはどう解釈したらいいのかなというけれど、これはある意味、人口が減ってもできるだけそういう地区の学校は残すような方策を考えていってはどうかと思っています。ただ、それが今お話ししたように一方でそういう学校を維持するためには行政としてそういうことができるのかどうかというのも財源の問題もありなかなか難しいと私は思います。

それで、もう一回戻ります。これを聞いて赤羽教育長どうですか。

赤羽教育長

今日は本当にありがとうございました。今回はたたき台ということで、少子化、これは松本市だけではなく日本全国、長野県どの市町村でも喫緊の話題です。昨日も近くの市の部局長から似たようなことで私に相談され、論議を始めていかななくてはいけないということがありました。

先ほど「これは教育委員会としての考えか」と市長からお尋ねがありました。私どもも今まではどちらかというと「いじめ」や「不登校」が教育委員会として喫緊の問題として扱ってきましたが、今日これをきっかけにして教育委員会としてもぜひこの問題をきちっと捉え、今度どうしていくのか、市長からもご指摘のあった点も踏まえながら、まさに今日は各部長さん方もいらっしゃっていますので、こども部、健康福祉部、地域づくり部、まさに市長部局の皆さんとも総合的にどうしていったらいいか論議を進めていきたいと思っています。

そして、どこの学校に行っても充実した教育が受けられること、人数の大きい小さいではなく、どこの学校にいても、「すべての子どもに優しい

まちづくり」ではないですが、すべての子どもにとって、例えば学力保障や心の問題等をきちんと保障していけるような学校を教育委員会として論議を進めながら進めていけたらと思っています。

今日は、少し突拍子もないといいますが、ご提案もあったかと思いますが、是非たたき台ということでご議論いただいて、これから教育委員会として進めてまいりたいと思います。

菅谷市長

花村さん何か追加はあります。

花村委員

確かに、過疎地の人口を増やすということは市長さんがおっしゃっていたとおり難しいことだと考えます。ですので、学校の存続を考えた時に、特認校制度ですか、どちらからの学校でも通えるように、一時的でも夏季、冬季は別としても夏季だけでも一緒にそういった特認制度を利用して生徒数が増えればいいのか、そういうことも一つあるし、ICTを使うならその専門家を呼んできて、ICTの根源から教育を含めた意味での、そういったエキスパートを誘致してはどうかと勝手に考えています。

菅谷市長

今日はある意味問題提起ですので、教育委員の皆さんからいろんな考えを聞かせていただきました。

それでは、全般を通してそれ以外何かご意見ご提案がございましたらどうぞ発言をお願いします。

市川委員さん、大丈夫ですか。何か言いたいことはないですか。

市川委員

あえて言うのであれば、スピードアップです。何かやる時にもう少しスピードを上げられたらという思いがあります。

菅谷市長

課題解決のためのお尻を決めておいてそこに向けてやっていけばいいというようなことになりますか。

市川委員

いろいろやる前に検討することも大事ですが、全体でなくどこかで小さくやってみることが大事だと思います。

菅谷市長

要するに、モデル的なことをどこか小さいところでやってみたらどうかということでしょうか。

市川委員

そうです。今、働き方改革とか言われておりますが、全ての学校でやろうと思うと大変だと思いますが、モデル校を設定し、実際にやってみる、行動を起こすことが大事だと思うのです。

菅谷市長 私は職員に対し常々「スモールサクセスストーリーをつくれ」と言っております。小さい物をつくってそれを積み重ねていくと大きな流れになります。そうすると動きが早い。それがうまくいかなければまたそこは見直せばいいのです。

そういったことを教育部長さん、よろしくまたお願いします。

菅谷市長 それでは、本日予定しておりました議事が全て終わりました。それぞれ委員さんから有意義なご意見をいただきましてありがとうございます。

本日の内容につきましては、事務局で議事録を作成し、速やかに公表していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、最後にせっかくだすから部長さんがいますので、一言ずつお願いします。それではこども部長さんから感想をどうぞ。

伊佐治こども部長 今、長野県では「信州やまほいく」を認定して自然に親しむ保育を全国にアピールしております。松本市内では9園認定されており、とても好評で認可外保育園の1園で満員になりつつあるということを知っています。

学校でもこのように自然を生かしたゆとり教育のようなことができればチャンスがあるのではないかと思います。

菅谷市長 それは親の意見ですよ。結局は子どもではないですね。親がそうしたいだけだから、ずっと行くかといったらそうではないと思います。結局は、高等学校になるとどこかに行ってしまうと思います。ですので、本当にそれがいいかどうかということを考えていかなければいけないと思います。阿部知事はそう言っておりますが、ご自分のお子さんは東京へ行って東大へ行かせるというような話を聞いています。言っていることとやっていることが全然違います。だから、言葉で言っても自分がやるならいいですが、そうでなかったら信用できないですよ。いいことはいいですよ。一時期子どもをそういったところへ連れていくことはいいですけど、そういう子がそこに住んでくれるかといったらまずあり得ないですよ。

伊佐治こども部長 住まなくても、自然を生かしたゆとりの教育ということが何かヒントになればいいかなと思います。

菅谷市長 しかし、日本のゆとり教育は否定されたわけですからね。だから、日本



全体の問題ですよ。

樋口健康福祉部 健康福祉部は子どもの健やかな成長を学校教育の現場の皆さんと一緒にやっていきたいなと思っています。

今年、健康福祉部的には子どものピロリ菌の検査を導入して、将来に向けて対策をする、まさに健やかな成長を手助けしていきたいなと思っています。

守屋地域づくり部長 地域づくり部長の守屋です。今日は特色ある学校づくりといったお話で教育を核にした、あるいは学校を核にした地域づくりというようなことでご提案がありましたけど、地域づくりの現場で余りそういった議論が一緒にされていないような部分があるようなので、そこが別々のことではなく一体のものとして、地域づくりという観点でいい教育をしていくということで、地域の場でも一緒に議論ができるといいかなと感じてお聞きしました。

菅谷市長 それでは、丸山総務部長。

丸山総務部長 総務部といいますか、実はこの会議の前に庁内の情報化推進委員会という部局長の会議がありまして、これから改めていわゆる地域の情報がどうしているのかというのを事業に落とし込んでいくための準備を進めているところですけど、ICTといういろんな分野でそのICTという言葉が前と同様に使われているのですが、ICTやAIとか聞こえがいいのですが、あくまでICTは道具といいますか、手段の一つなのでそういったところは今年度、学校の情報化基本計画をつくられるところですので、そちらとも連携させていただいて、市として学校の情報化について何らかお手伝いといいますか、ご支援できることはしっかりとやっていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

菅谷市長 ありがとうございます。では、最後、矢久保教育部長。

矢久保教育部長 地域は学校があって子どもの声が聞こえないと駄目だろうなということが根本にあります。ですので、一番いいのは、自分の子どもが必ずまた戻ってくるという教育が一番必要だと思いますが、なかなかそうもいきません。地域づくりをやって人を増やしていかなければならないということと一緒にやっていかなければいけないので、親子で「こんな魅力ある学校

